

第3回飯綱町子育て世代支援施設建設検討委員会（平成31年3月11日開催）

・出席委員

小林千登世 山口智美 清水由佳 眞喜志亜矢子 増田祐美 長崎夏美  
太田光洋（長野県立大学健康発達学部こども学科長兼教授）  
栗田喜美江（さみずっ子保育園長） 押鐘裕子（保健師）

・欠席委員

松木春菜

・出席事務局員

桜井教育次長 若林子育て支援係長 横田保育士

開会 10:00

1. あいさつ

2. 太田教授による「現在の乳幼児期の子育て論」について

3. 新施設での機能について

(1) 県内先進地の照会

(2) 新施設で取入れる機能について

4. 報告事項

地方創生推進交付金について

次回の検討委員会の日程について

5. その他

閉会 11:30

1. あいさつ

事務局：挨拶の言葉あり。

委員長：挨拶の言葉あり。

2. 太田教授による「現在の乳幼児期の子育て論」について

事務局：それでは、太田先生にお話をさせていただければと思います。

太田教授：別紙資料に基づき説明。

（これから支援センターのこと、子育て中の方に繋がる話について）

今の子育ての状況を大まかに捉えると、先が見えなくなっているということ。今まで一生懸命勉強していい学校に行って、いいところに就職したらそのまま安泰。そういう生活スタイルはもう当たり前ではなくなった。転職をする人も多くなっているし、AIの発達もあって、これから先半分ぐらいの仕事がなくなると言われている中で、子どもたちにどんな力をつけていったらいいのかがよく見えなくなっていることが1つ。2つ目は日本の子育ての特徴として、母親に負担が偏っていること。父親が外で働いて、母親が家を守るという専業主

婦の家庭が多い社会から、女性も働きに出るといった社会になった。労働力が足りない背景もあり、まず国内で働ける人にどんどん社会に出てもらう政策とも相まってきているということ。そういう社会の変化がある一方で、今までの慣習で母親が子育てをするようなイメージや、実際の仕事内容がそのまま残ってしまっている。3つ目は子どもの体験が乏しくなっていて、子どもが安全安心なところで遊ぶことができなくなっている、それから世の中便利になり、今まで手や頭を使ってやらなきゃいけなかったことが、なかなかできなくなっている。それから仕事を持つ家庭生活になってくると、子育てに時間がかけられなくなり、保育の現場でよく昔言われたのは、「しつけは家庭で」と、分業みたいなことをよく言った。そんな役割みたいなことを言っていたが、これからはそういう時代ではなくて、「共育で」というか、一緒に育てていくというようになっていくと思う。こういう大きな状況、大きな変化がある中で子育て支援を考えていくときに4つ観点がある。1つは子育て。子どもが育っていくために必要なこと。2つ目が親としての子育て。経験や育ちの問題、それをどう支えていくか。3つ目は親子関係をどう結んでいったらいいか。子どもと関わる経験が少なくなり、子どもが生まれて初めて小さい子と関わるということになってきている。父親は子どもの言いなりになることもよくある。4つ目は子育てを直接している人だけでなく、その周りにいる人たち（地域）がどんなふう子育てを支えていけるかという観点も大事だと思う。4つに分けて考えて、今問題になっていることや大事になっていることを、支援センターをこれから考えていくときに、その機能の中に埋め込んでいけばいいと思う。子どもの育ちに関して言うと、平成29年に幼稚園・保育所・こども園の国のガイドライン（幼稚園教育要領・保育指針・こども園教育保育要領）が一斉に改定された。どこの園に行っても共通の質の高い保育をやろうということになった。それを幼児教育というようになった。幼稚園園でも保育園でもこども園でも、幼児教育という共通の内容はまずきちんと保障しよう。それ以外のところで、生活時間も違うので、その過ごし方はそれぞれ特徴に合わせてやっていこうということになっている。どこの園に通っても、基本的には同じ教育が受けられるということになる。2つ目に「認知的能力」。教育のどこの段階で投資をすると一番効果があるかという経済学的な研究から、幼児期にお金をかけることで一番効果があると言われていた。幼児教育が全世界中で注目されるようになり、そこを変えていこうという動きがある。例えば幼稚園に行き幼児教育を受けた子と受けない子が小学校に入ったときに知的な力を測ると、幼児教育を受けた子どもの方が知的には高いが3年ぐらいすると差は無くなる。ところが、30年後の30代40代になった人たちが社会的に成功しているかどうかを比べると、幼児教育を受けた人たちのグループの方が社会的に成功していて幸せに暮らしている。幼児教育を受けなかったグループの方は不安定な生活をしているなど、統計的に有意な差がある。この違いは何か、学力的な知的な力では小学校中学年ぐらいから追いついて同じになっているので、学力ではないところに関係があるということになる。そこで注目されたのが「非認知的能力」。非認知的能力というのは、粘り強く取り組むと、がまん強い、人とのコミュニケーションが上手にできる、人との関係の中で自分をどのようにコントロールして

いけるかというような力。そういう力を付けていかなきゃいけないということで「非認知的能力」は非常に注目されている。認知的能力もあつた方がいいが、非認知的能力も高い方がいい。最初に今の特徴で先が見えなくなっていると説明したが、その先が見えなくなっているということは、準備して教育ができないということ。将来こういう社会になるから、こういう準備をしておけば子どもは幸せになると描けなくなっている。だからどうしたらいいかという、今の子どもたちに育てていかなければならない力は、子どもが自分で自分の問題に直面したときに、それをちゃんと自分で解決、乗り越えていける力を育てることだと思う。それは1人で乗り越えることもあるだろうし、人と協力して人の力を借りてということもあると思う。そういう力も含めて、育てていかななくてはいけない。幼児教育、幼児期ならどうなのかと考えたときに、子どもにはいろいろ特徴があり、基本的に人に合わせるのが苦手、自分のやりたいようにやりたい。でも好きなことをやっているときはすごく集中してできる。そういう特徴を持っている。乳幼児期でそういう活動って何だろうと考えると、それは一つ遊びである。乳児期から幼児期までの生活全体は生活と遊びで成り立っている。幼児期の後半になると、その生活と遊びが少しずつ分かれて、みんなで目的を持ってやる活動みたいなものが別れてくる。保育園なら当番活動や、皆で生活発表会をやる、劇を作るとか。好きなことばかりをするのではなく、目的を持った活動を皆と一緒に協力してやっていくような活動をしていく。そんなふうにだんだん子どもの力に応じて活動内容が変わっていく。子ども達はその遊びの中でいろんなことを経験している。自分の感情や行動をコントロールする力、相手の意見を聞いたり自分の意見を主張したりコミュニケーション能力など。幼稚園や保育園で、先生が皆に話を聞いてもらいたい、子どもに話を聞いてほしいときに「ほら、なんとかちゃん静かにして先生のほうを見て」と注意して向かせると、そういうクラスの子どもたちは小学校に行ったら話が聞けなくなる。注意する人がいないと聞かない。それは保育園でも一緒。でも、大事なのは、先生がする話が毎日楽しいということ。先生の話を聞くとか何かいいことがある、面白いという気持ちが育てば、自然と人の話を聞くようになる。子どもにとっての必要感。その必要感のないまま指示通りに動く子どもは内面が育ってはいかない。一番望ましいのは、幼児期にちゃんと聞く力が育っていて、小学校でそれに答えてくれる先生がいて、そうすると自然に勉強に入っていける。子どもの主体性や自主性をどう育てていくかが大事。一人一人が遊びを通して育っていく。小学校に上がってから自分でいろんなことを学んでいくための、勉強するための土台になる力を、遊びを通して育てている。知的な好奇心や話を聞く態度、友達と協力すること、自分の意見を言うことだって遊びの中でたくさんやっている。幼児期にやることと、小学校でやることは違うので、段差があつて当たり前。幼児期で育つた力を土台にすれば学力は付いていく。その次のところに行く、一人一人の個人の尊重が大事になっている。特別な支援を要する子どもが増えている。一つは子どもに必要な体験を小さい頃から積み上げられていなくて、多動に見える、落ち着かない、不安定など、それは障害なのか環境からそうなっているのか分からないケースは小さいときほどある。一人一人に合ったやり方を考える必要がある。例えば、食事のとき

にみんなが揃うまで待って一斉に食べることは減ってきている。グループごとに用意ができたところから食べて、早く寝たい子は寝て、子どものペースに合わせて考えていく。それはずっとそのままでいいということではなく、最初は食べることは大事だが、4歳5歳になってくると、一緒に食べるのが楽しい、お喋りして食べるのが楽しいなど、大人が「ご飯食べに行こう」と言うのと同じ。好きな友達と食べたい、皆で食べたいなど食事は社会性がある。集団の中での1人1人を保育園では大事にしている。それから継続的に成長を見ていくということ。これがなかなか難しい。今、学校教育全体で幼稚園、幼児期から高等学校や大学まで、主体的で対話的で深い学びがキーワードになっている。主体的とは自分でやりたいと思うことをやる。対話的とは人と交流したり、本を読んだりということ。結果として学びが深まっていく。後は、子どもの育ちに関しては共育が大事になるだろう。また、小学校とどう接続するかは今すごく注目されている。保育園では小学校に向けてのアプローチカリキュラムがあって、小学校を意識した幼児期の最後の頃にこんな力が育ってほしいことを想定したカリキュラム。小学校側では子どもたちが学校生活に慣れていくためのスタートカリキュラムが考えられている。このアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムで、保育現場（幼児期）から学校現場（学童期）につなぐことがされている。幼児期の終わりまでにこんなふうに育ってほしいというのが「10の姿」と言われていてガイドラインの中に書かれている。子育て支援の観点としては子どもの育ちは大事。支援センターや保育所など、各家庭が子どもにとってどんな環境になっているか分かりにくい。子どもの物がたくさんあって生活している家庭もあれば、子どもの物がほとんどなくて、子どものために親も時間を取らない世話をしない家庭もある。家庭によってばらつきがある。でも保育園や支援センターに来ると、この時期の子どもたちが遊ぶのにふさわしい物がある。あるいはこの時期の子育ての不安などの相談にのってくれる人がいるとか、情報があることが大事になる。親の育ちに関しては、毎日行けるところがあると一番いい。月に1回の相談ではなくいつでも相談ができる、ちょっと気になることを友達同士で聞いて解決する、そういう環境が必要ということ。支援センターに関して二十何年やっている中で、母親が一番育つのは誰かの話を聞く（講演会）とかではなく、自由に遊びに来る場所。自由に遊びに来て他の親子の様子見たり、気になることを母親同士で話したり、先生に話したり。そこで解決して、ちゃんと育てる力をつけていく。皆、親として育つ力をちゃんと持っているということ、子どもも皆、ちゃんと学ぶ力がある。その学ぶ力がちゃんと発揮できるような環境や状況を作ってあげればいい。それから、子どもと離れる時間を作ってあげる。飯綱町とうちの大学で提携をする際には、母親が子どもから離れられるようにするための一つの手立てとして、学生を使いたい。学生は子どもと遊ぶのが好きなので、母親は少し自由にしてもらいたい機会を作りたい。都市部だとボランティアを使う。ボランティアの人たちには講座を受けてもらい、今の子育てを理解してもらいたい。そうしないと、僕らと同世代より上の人が多いので「昔はこうじゃなかった」とよく言われる。「昔団地に住んでいて、子どもが泣いたら子どもを連れて泣き止むまで外に出て、泣き止んでからそっと家に帰ったものだ。先生そんなの甘やかしすぎだ」

と言われて「もう次回の講座から来ません」という人がいた。でも他の人に説得されて5～6回の講座を受けると、毎回自転車で颯爽と支援センターに来て、ボランティアで子どもの中に入って、「毎日楽しくてしょうがない」と変わった人もいる。ボランティアは世代の違いがある。そういうところはお互いに支える地域の人たちの相互理解や、世代間の理解が必要になってくる。親の育ちの中で課題になることは、両親（夫婦）の意見の違いが子育てには影響が大きい。母親に偏っている負担を、父親にできることはやってもらい、それぞれの特徴にあった分担を含めてやって欲しい（役割分担を考える機会を作りたい）。それから継続的に親を支える仕組みとしては、妊娠期から中学の終わりぐらいまで担当の保健師がずっと関わりながらいく。教育の中での継続性と同じように、子育ての継続性も大事。親子関係は、今どうやって関わったらいいかわからない人が多い。特に苦手になっているのは、子どもの姿から子どもの内面を読み取るということ。親が子どもと目が合わなくなっているとよく言われ。例えば赤ちゃんがハイハイをしていて段差が見えると、そこで止まって母親の顔を見る。母親がにっこり笑って「大丈夫」って顔をすると、赤ちゃんはそのまま進んで落ちたりする。母親がここで、「危ない」って顔をすると、赤ちゃんはそこで止まって違う道に行く。赤ちゃんは自分で判断していないということ。最初の判断は母親を手掛かりに判断していく。子どもと目が合わないということは、子どもがその判断に困ったときに、母親のサインがそこに届いていないということになる。それが昔に比べるとすごく頻度が落ちていると言われている。子どもは母親を探して見ても、母親はスマホ見ていたりする。そうすると親を頼りにしないため、怪我をする場合もある。いつも目が合わなくてはいけないとは言わないが、自分の世界に入って気がつかない、人から言われて初めてハッと気がつくようなことも結構あったりする。鉄人28号（リモコンで操作されているロボット）と鉄腕アトム（自分で考えて行動するロボット）どちらの子どもがいいか母親たちに聞くと、10人中10人が鉄腕アトムと言う。でも今朝家を出てくるときどうだったか聞くと、「早くこれを履いてほしい」とか、「着てほしい」とか、自分の思う通りに動いてほしい気持ちは日常的に起こる。だから、時々立ち止まることが大事で、いつも子ども第一にはいかない。いかになくていいけれど、時々立ち止まって子どもの事を考えてみることで、その後何か考えることがあればいいと思う。親子関係のあり方では「言葉の力」がすごく大事。例えばスーパーに買い物に行って、おまけが付いたお菓子の前で「これ買って」と言って泣くなり座り込むなりしたときに、こんなところで泣かないで恥ずかしいと黙って引きずっていく場合と、「このおもちゃはおうちに似たようなものがあるから、家に帰ってそれで遊ぼうね」と言って言葉をかけて、泣いたままでも連れて帰るということでは全然意味が違う。例え1歳、2歳でも意味を合わせて伝えていくことがすごく大事。頭の中で母親との会話や、大人との会話を思い出してこういう時はこうだと考えられるようになる。2歳児がしつけの年齢と言われている。2歳児には特に理由を説明して、子どもに分かる言い方で説明していくことが大事になっていく。いい子育てとはどんな子育てかという、時々泣いたりしてもだいたい機嫌良く過ごしているように見えたら、その子育ては悪くはない。絶対これがいいという子育てが

あるわけではないが、一つ目安になる。子どもらしさの尊重の中で、自分の手や体を使って沢山経験をさせた方がいい。赤ちゃんの手の発達はグッと握られているところから、少し開くようになって、それから3本で握れるようになっていたり、つまめるようになっていたり、あるいはそれに応じてスプーンの握り方が変わってくる。そういう動きを促すようなおもちゃが作られている。それから最後に発達にとって時期ごとに大事なものはある。乳児期に一番大事にすることは大人との感情的な交流。それから、1歳から3歳ぐらいだと物の使い方。生活で使っているものがそのままおもちゃになる。台所で母親が使っている物がそのままおもちゃになり、ちゃんと道具の使い方を習得している。それがその後の遊びや生活に生きてくる。同時に、ご飯食べる前に手を洗うとか、「いただきます」をすることとか「ごちそうさま」をすることとか、デザートは最後の方で食べるとか、そういう決まりみたいなものも、この年代でだいたい身に付けていく。3歳以降の変化は外に見えることが少なくなる。頭の中がすごく広がり想像力が育つので物語が大好きになる。絵本でも2歳までの絵本と3歳以降の絵本は、物語の長さや、物語性が全然違う内容になっていく。それを遊びの中で実現しようとする。遊び方もいろいろで、塗り絵を置いておけば、塗り絵を切ってダンボールに貼って遊んでみたりする。大人から見るとよく分からなくても、子どもがやっていることには必ず何か意味があって、子どもはどこかに面白さを感じていて、何かが育っているというように見たほうがいい。小学校の時期は発達の中心が勉強。中・高校生ぐらいは親友との人格的な交流。その後の子育て期や仕事を始めたときは、社会に出た人たちの発達を、人間としての育ちを促すのは、仕事と子育て。子育てしながら自分もずいぶん大人になったと昔は思った。自分のことを最優先じゃなくなるだろうし。そうやって、それぞれの人間の発達は一生続き、その発達の段階ごとに自分を変えて、人として成長させる活動がやっぱり違うということ。

事務局：せっかくの機会なので、今お聞きした中で何か先生にお聞きしたいこととかありましたらお出しただければと思います。

委員：質疑なし

### 3. 新施設での機能について

委員長：3番目、新施設の機能についてということで、よろしく願いいたします。

#### (1) 県内先進地の照会

事務局：南箕輪村「こども館」の視察報告（別紙資料の通り）

太田教授：6年生まで利用できるのか。

事務局：この写真見ると中学生も。

委員長：制限なしと書いてあった。

事務局：18歳までカバーできている施設なのかもしれない。高校生まで通えるという施設です。だいたいスケールは大きいので、これを飯綱町でつくるのは現実的には難しいところはある。例えば遊戯室であれば下のBGの体育館を使ってもらうことも可能になってくると思う。今、町民会館でやっているところというトイレもないですし、相談す

るスペースも、バリアフリーというわけでもない。

事務局：小布施町「エンゼルランドセンター」の視察報告（別紙資料の通り）

委員：（実際利用したことがある）ホールがやっぱり良かった。今ここにはないから思うのかもしれない。

太田教授：ホールは何か特別なものがあるのですか。広い。

委員：広くて、滑り台もあって、車とか乗れる。

事務局：プレイルームでちょっと大きめな子たちが遊べる、走り回ってもいいような感じの。

トイレも、オープンなトイレから、ちょっと大きくなってきて恥ずかしいなんていうお子さんのプライバシーも守れる個室もあったり、シャワールームもあったりという感じですね。ハイハイする部屋にカーテンで仕切られている使用中か未使用中か分かる簡易的な授乳室がある。

委員：これぐらいで十分。カーテンで大丈夫。

事務局：しっかりと授乳室になっているよりも分かり易いかもしれないですね。

事務局：宮田村「うめっこらんど」の視察報告（別紙資料の通り）

委員：ちゃんと言葉で具体的に書いてある。

事務局：やってはいけないことが。

太田教授：逆効果じゃない。

委員：こういうこともあるって覚えちゃうよね。

事務局：安全対策のため、廊下には通常は座ったりできるスペースの中にヘルメット、有事の際に何かあったときに避難に必要なものが入っています。

今子育て支援センターでもファミリーサポートセンターをやっています。ここでは子どもを預かってくれる方たちの写真を貼って、顔が見える状況になっています。

太田教授：お母さんたちは、小さい子がいるといつも床に座る感じになりますけど、椅子とかはいらないものですか。

委員：いらない。

太田教授：物入れはいりますよね。

事務局：そうですね。

事務局：飯島町「いっ子センター」の視察報告（別紙資料の通り）

太田教授：コルクの床はコンクリートの上にはってある感じですか？

事務局：外です、はい。

委員長：さみずっ子保育園と同じような感じですか。

事務局：あれより本当のコルクで、水を撒いても透水するような。こちらは砂なので、どうなのでしょうか。

太田教授：メンテナンスは。

事務局：苔が生えてくるのかなとは考えられるかもしれないですけど。柔らかくて、転倒し

たりするとき安全です。

太田教授：絵本はけっこうな量が置いてあって、背表紙で入れているのですが。基本こういうふうに置ける、表紙が見える形で入れ替えられるように、表紙が見える棚の後ろに本が入っていて置き換えられるような感じの方がむしろ、使いいいかもしれないですね。

事務局：子供が自分で選べるところも。

太田教授：使う人数にもよりますが。

事務局：飯山市「きらら」の視察報告（別紙資料の通り）

事務局：一応エレベーターはありましたが、お伺いしたときには今まで使ったことはそんな  
にないと言っていて、みなさん赤ちゃん連れて階段を上っている感じです。

委員：3人連れていたら使いたいかもね、2人ならいけるかもしれないけど。

事務局：高森町「あったかテラス」の視察報告（別紙の通り）

委員長：妊婦さんはどのくらいご利用されているの。

事務局：利用数は確認していませんが、生まれてからの方の利用が多いかなという感じはど  
この施設に行っても。妊婦さんはいらっしやらなかったかなという感じです。ただ生  
後間もない子でも利用できていい。隣がレディースクリニックです。

事務局：元々お医者さんがこんな施設をという提案をしたそうです。ケーキ屋さんがあり、  
老人施設があります。

太田教授：広さは、こちらで計画しているのと比べてどうか。

事務局：ほぼ同じ規模で2階にコワーキングスペースがあって、2階から眺められるよう  
になっていますが、お母さんが見えるので後を追ったりして上がってきってしまう気が  
します。

事務局：気に入ったところ、こんなところがいいなとか、ここ参考にできるなとかございま  
すか。

委員：男性が安心してトイレできる場所がありましたか。それがちょっと心配。

事務局：高森は男性用もありました。

委員：他のところは全部一緒になっていて、それだとお父さん絶対来ない。

太田教授：トイレのスペースけっこうありますね。

## (2) 新施設で取入れる機能について

委員長：それでは意見交換を。ここは困るなとか、ここはどうしても欲しいというようなこ  
とがありましたら、どんどんお出しいただければと思います。今男性トイレのご意見  
が出ました。どうですか。

委員：お母さんたちは小さい子がいると座って過ごす時間が多い。椅子はいらないが板間  
ではなく、子どもをみながら子どもの動線について行くことが多いので、絨毯敷きだとあ  
りがたい。（座っていても痛くない）

委員長：フロアの関係ですね。床がいいのか、絨毯もあった方がいいのか、柔らかマットが



いいのか。

委員：南部保育園の床って柔らかい、あれはいい。掃除するのも楽し、絨毯だと嘔吐した場合等浸みこんでしまう。

事務局：おこさんが転んでも。

委員長：他はどうですか。

太田教授：物入れのスペースを考えて。

事務局：あったかテラスは物入れがほとんどなく大変だと言っていた。

委員長：倉庫が必要と書かれている。

太田教授：おもちゃは季節や内容によって多少入れ替えた方が子どもにとっても新鮮。

事務局：お金の問題もあるが、今日見ていただいた施設のいいところ取りをしたい。次回、いいところを皆で整理してなおかつ、その結果を設計屋さんに見てもらい、そんな作業をしていただきたい。ぜひ行ってみたい施設がありましたら検討いただければと思います。やっぱり現場に行ってみるとそれなりに、こういう感じがいいねってこともあると思う。

太田教授：水遊びのスペースはあるのか。外に噴水作るとか言っていたのでは。

事務局：作りたいと思っている。

太田教授：水はあるといい。

事務局：石を敷き詰めて、自然の川が流れるような感じのところがあった。そこで夏とか水遊びができる。

太田教授：公園みたいに、真ん中から水が出て常に水が薄く流れているような、ああいうとこの方が遊びやすい気がする。

事務局：そんなイメージで考えている。園庭というか、建物の前。

委員長：小布施のような感じですか。

委員：予算で駄目なら仕方ない。就学前ではなくて、町民会館にイベント等で来た時に小学生も一緒に遊べるようにしてほしい。

太田教授：就園前？就学前？

事務局：主には就園前の方がメイン。

委員：イベントの時は就学前。

事務局：ご存じの通り大型遊具（アスレチック）がある。小学生が休みの日に遊んでいる。移動してあそこのどこかに作りたい。いづれにしても大型遊具は無くしてはもったいない。年数が経っているので、そっくり全部移設できるかどうかはこれから。あのぐらい大きなアスレチックがあったほうが小学生には楽しみなので、移設できない分は継ぎ足したりしてあのぐらいの物を作りたい。そうすると、どのように庭を分けするか公園にするかはこれからですが、そうすると小学生はそこで遊んでもらって問題ない。

太田教授：築山は予定にあるか。

事務局：作りたい。冬も遊べる。

太田教授：小さい子でもそれなりに登れるくらいの。ボールプールは管理が大変なので木の  
ボールプールはどうか。卵くらいの小さい木のボールプール。

委員：投げて遊んだりするので投げたらどうなるか。

委員：桐みみたいな柔らかいですよね。どこかのイオンに軽くてけっこう柔らかいものがあった。  
でもぶつけたら痛いですよね。

委員：重い木だと投げないのかもしれない。

委員：軽いボールだと投げたくなる。出して遊んでいる。

委員：出すのが楽しい。

委員：厨房は作るのか。イベントでクッキングは楽しい。

事務局：そういう時は隣を借りるとか。

事務局：どこかの施設で、ちょっとした調理ができる場所があった。そこで料理教室をや  
っていると聞いた。

太田教授：けっこうスペースが要る。ちょっともったいない。

委員長：遊べるスペースが少なくなる。

事務局：飯島町も近くの施設を借りている。

委員長：町民会館の調理室を借りればいいのか。

委員：調理するときだけ別会場になってしまう。

委員：参加する人は移動してまた戻ってくるみたいな。

事務局：町民会館の図書室や元気の館やボランティアセンターも空いてきますので、今ある  
施設をどのように活用していけばいいか。そこら辺を見据えながら、調理室、厨房を  
どうしようかですね。あと予算的な面もあるので。

太田教授：そうですね、厨房に何を入れるか。

委員：電子レンジのオープンで焼けるくらいの物だったらできる。簡単な。そんなに手の込  
んだものは下準備が大変。

委員：火さえあれば。

太田教授：ピザ窯を外に置けばどうか。お母さんたちが、何か飲んだり、ご飯をちょっと温  
めたりするところは必要。

委員：離乳食を温めたいと思ったことはある。冷蔵庫とレンジが。

太田教授：それくらいは必要。

事務局：施設によっては電子レンジが置いてあって、自由に使える施設があった。それもあ  
るなと考えている。

太田教授：お母さんたちが自由に使えるところが多い方がいい。

委員：ワークセンターを2階に作るとなると、ワークセンターを利用しているお母さんから  
子どもが見えた方がありがたい。

委員：それは二つに分かれると思う。

委員：マジックミラーなどで、お母さんからは見えるけど子どもからは見えないみたいな。

委員：朝のテレビで、隣の部屋にガラス越しの部屋を作って、お母さんがいつでも見えている状態。いいなっていう考えもあれば、こうやって分かれて仕事に集中したいっていう考えもあった。

委員：子どもが預けられることが分かってくれば、お母さんの姿が見えていても大丈夫だと思うが、それまでの間がちょっと見えていると辛いところがある。慣れている子たちは、見えていた方が、お母さん仕事しているなって、遊ぶのに安心する子もいるかもしれない。

事務局：2階建てになるので、同じフロア（ワークスペースと託児スペース）はちょっと難しい。ワークセンターは全部2階。1階建てにすれば敷地がもっと必要。2階でも子どもの様子が分かる工夫がないか。

太田教授：吹き抜けは駄目か。

委員：床が狭くなる。作業部屋が減る。

委員：総2階で考えているのか。

事務局：子どもの声が聞こえると集中できないのではないか。

委員：お子さんの泣き声など、お母さんによってはすごく気にされる方とか、全然気にされない方とか。

事務局：こういうスペースと、個室を2つ設けられれば最高。

委員：その他にセミナースペースも欲しい。

事務局：手仕事系もリクエストいただいているので、パソコンじゃなく手仕事をする場所も。ミーティングやスキルアップをするセミナーの会場と、ワークスペースが同時にできるようなスペースが必要。

太田教授：なるべく仕切りを、壁で仕切らないような造りがいいような気がします。小さい部屋をいっぱい作ってしまうと、使い勝手がすごく悪くなる。建物にあまりお金をかけないで、中に入れるものにかけた方がいいような気もします。食事スペースは、遊びのスペースと分けてとれそうな感じですか。

委員：時間で区切るのもある。11時から1時くらいは、ここだけは遊ばせません、食べるところですっていうのはできるか。その2時間くらいでいいと思う。

太田教授：椅子とテーブルは要らないものか。

委員：いる。椅子も欲しい子もいる。

委員：今手作りの牛乳パックの椅子で、あの高さがちょうどいい。

委員：あれで十分。転んでも痛くないし転がして遊んでいる。

太田教授：絵本を読むときもそういうのに座ってとかね。保育園で1歳児とかどうか。

委員長：保育園は1歳児も座っている。

太田教授：座った方が食事は落ち着く。テーブルと椅子があつて、そこは食事以外でも使ってもいい。

委員：そういうところで、絵をかいたり粘土やったりっていうスペースを、その時間だけはお飯にするとかもある。

事務局：ありがとうございました。また次の機会もやっていきたいと思います。

#### 4. 報告事項について

地方創生推進交付金について

事務局：(資料に基づき説明) この国の事業は、新しい建物を作るという他に、ソフト事業も同時に行っていくものです。地方創生推進交付金を申請して、3カ年計画でやっていく事業です。事業名は、「もっと自分らしく輝くiママ事業」です。内閣府に認めてもらいと、4月1日からすぐ交付金を使えます。また、今太田先生のおられる長野県立大学と連携していく仕事もあります。

次回の検討委員会の日程について

事務局：4月入ってすぐに設計業者選定の作業をやりたいと思っており、4月中に入札もしくは、プロポーザルになるかと思う。次の会は業者が決まってからの報告や原案作りの話になるので、連休明けになります。その都度情報については随時お話していきたいと思いますので、ご理解ください。

委員長：閉会でよろしいですか。その他何かございませんか。5番のその他はよろしいですか。皆さん本当にお疲れ様でした。やっぱりお母さんたちの声はとても大事だと思いますのでぜひこれからもよろしく願いいたします。太田先生本当にありがとうございました。これからまたいろいろ宿題もあるかもしれませんが、いい施設ができるように頑張っていきたいと思います。よろしく願いします。以上で閉会にします。

#### 5. その他

なし

参加者一同：ありがとうございました。